

# 『竹むきが記』の成立について

——特に執筆態度を中心として——

白水直子

はじめに

平安朝以降の宮廷女房日記は、南北朝時代の「竹むきが記」をもって終焉を迎えるのであるが同記の執筆の意図とは一体何か。

日記は日々の記録であるが、それらには叙事的なものと、叙情性豊かなものがある。日記が実録（生活の記録）である以上、叙事的なものがあるのは当然だが、「竹むきが記」にはそうした叙事的なもの、叙情性豊かなもの両面が内在している。これは執筆の意図の変化によるものなのだろうか。その意図とは一体如何なるものなのか。

本稿では、執筆態度に焦点をあて執筆の意図を追求し、その結果から成立時期を再検討してみたい。

## (一) 執筆態度について

### 文末表現と叙述内容の関係

「竹むきが記」の形態は外形上からも内容上からも上巻と下巻とに分かれており、更に上巻・下巻ともそれぞれ前半部と後半部とに区別できる。従って便宜上それぞれを上巻の前半部・後半部、下巻の前半部・後半部とする。

この形態と回想日記という性質から多用された時の助動詞「き」と「けり」の文末に於ける使用の傾向を照らし合わせると、上巻と下巻、特に上巻の前半部と後半部とでは極めて顕著

な傾向を示している。

「竹むきが記」における時の助動詞「き」と「けり」の文末使用状況

下 卷		上 卷		
8		65		き
51		5		けり
後半部	前半部	後半部	前半部	
4	4	15	50	き
32	19	5	0	けり
・家門への執着と仏道に志す心中が叙述の中心。 ・「けり」が大半。		・実俊の養育・西園寺家再興の記録が中心。 ・「けり」の使用が目立つ。		叙 述 内 容
		・公宗との恋・結婚等、内容急変。 ・「けり」の使用が始まる。		・宮中奉仕記録が中心。 ・「き」の使用のみで「けり」の使用無し。

注(1) 和歌、会話文は除く。(地文に限る)

(2) 終止形のみではなく係り結びによる連体形・已然形も含む。

(3) 「古典文庫」本、松本聖至校の本文を参照した。

表からも明らかかなように各巻によって明確に使い分けられて

いることが認められる。又叙述内容の相違から生じる作者の意識の変化がみられ、それに伴う結果であるように思われるのだが、そこで今しばし具体的な考察に入る前に「き」と「けり」の意味の相違を確認しておく。

「竹むきが記」の時代よりおよそ五十年程遡った文永・建治の頃に著者(経尊)自身によって書かれた語源辞書「名語記」は、その中心視点は仮名反しの方法による同音相通同韻相通による語源解釈であるが鎌倉時代の珍しい語彙と語源解釈という点で著されており、その中に助動詞「き」と「けり」について次のようにある。

詞ノスエニミキ キ、キ アリキ ナカリキナトヲケル  
 キノ心如何 コレハ万葉ニ寸ノ字ヲキニヲケレトモイマタ  
 ソノ心ヲエス キハケリノ反 アリケリ ナカリケリ也  
 イマ又コレニツキテ不審出来レリ ミキ キ、キハマサシ  
 ク我身ノウヘノ事トキコエタリ コノケリハ餘所ノウヘヲ  
 キ、ワタル心地ナリ 如何 コノウタカヒサイハレタリ  
 シカラハミキ キ、キノキハコシノ反ノ心□□ヘキニヤ  
 ミコシ キ、コシ也 来ノ字ノ心タルヘキ歟 又云 ケミ  
 ノ反ハキ也 コノ義歟

まず「キハケリノ反」と言っていることから「キ」と「ケリ」は同義と見ていることがわかるが、「イマ又 コレニツキテ不番出来レリ」と疑問を提示した後には、「ミキ キ、キハマサシク我身ノウエノ事トキコエタリ コノケリハ餘所ノウヘヲキ、ワタル心地ナリ 如何」と述べている。つまり「キ」が「我身ノウヘノ事」すなわち話し手自身の経験したことを述べ、「ケリ」は「餘所ノウヘヲキ、ワタル心地ナリ」すなわち他人の経験したことを聞いている気持ちのする語であると言っている。「コノウタカヒサイハレタリ」というのは問答形式で問者の出した右の疑問と解釈説に対して、答者がそれに賛同したこととを示したものである。(この問答形式は天台宗などの「論義」に由来するものと思われる。) こうした問答によって「シカラハミキ キ、キノキハコシノ反ノ心タルヘキニヤ」と反切によるまた別の語源説を考えようとしているが、語源説はともかく注目すべきことは著者経尊が「キ」と「ケリ」は同義と考えながらも次いで「キ」を自己の体験、「ケリ」を他人の経験の伝聞を述べる語として、その使い分けを明確にしている点である。

これは、現代の「き」と「けり」の相違についての説である細江逸記氏の「き」は「目暗回想」で「自分が親しく経験した事柄を語る」もの、「けり」は「伝承回想」で「他より伝聞を告ぐるに用いられた」(『動詞時制の研究』昭和七年)を早く経尊が気づいていたことになる。こうした現代の研究と一致する「き」と「けり」の意味用法の相違を自覚し述べていることは、経尊の言語意識、言語感覚の鋭さを示すものである。

先でも触れたように、『竹むきが記』の作者と経尊の生きた時代に甚しい隔りのないこと、更に経尊が京都在住の人(稻荷山に幽棲して居た沙門)であったことも加えて、『名語記』に示された区別が「竹むきが記」の筆者にもあったと思われる。

例えば、石山詣での記事(六十六—六十八頁)

このけむは金のいさこにてゐたてまつれるとそ申侍。聖徳太子の前世の御本尊とかや。聖武天皇、東大寺をたてさせ給けるとき、かね世になかりければ、御きたうとも侍けるに、らうへん僧正ちよくをうけたまはりて、そのれいちをもとむるに、紫雲のたちければそれをしるへにたつねられ侍ける程に、この山にいたりてみるに、八ようのれん花のすかたなるいしの上よりたちければ僧正、此そんを、きたてまつりて七ヶ日きせいしけるに、よしの、さわうにて申

へきよしあれは、それにてきせいするに、まり程なるかね、よし野川にあり。人これをとらんとするにころひのきてとることをえず。ちよくしむかひけれはとられぬ。これにそかの御願しやうしゆし侍けるとかや。まんきにこまかに侍也。それより石をはなれ給はざりければ、くせくわんおんの像をつくりて御身中奉造てそ、石のめぐりに御ちやうをかたてまつれるとそ申侍。聖徳太子はくせくわんおんにておはしますなれば、御ほんそんなりけるゆへにや侍らん。この尊の御すかたはしれる人も侍らざりけるを火事侍けるに御たうの前なるやなきに光をはなちてとひうつらせ給けるを、らうへん僧正そのやなきにてうつしたてまつられけるを、いまも人うつきこえ侍なり。僧正の房このしにも侍ける。それよりらいとうまでやけるに、御たうはのこりけるとそ。されはたてられける所のむかしよりかはらざるよし申侍は、まことにや侍らん。

(本文引用は「古典文庫」本、松本寧至校による。以下同。)  
 数字は私注につけた。

右の文章は、「とそ申侍」・「とかや、まんきにこまかに侍也」・「とそ申侍」・「とそ」・「申侍」によって括られており、伝聞した過去の叙述になつてゐるといへよう。これらの

「けり」のなかで①②③④⑤⑥⑦⑧⑨は過去の事柄が現在にまで残つてゐる継続の意もあるが、他はその時限りのものであつて、「けり」を用いた意識は伝聞した過去の事柄にあつたと考えてよく、この場合それは話者の話し口調ではなく、作者によつて表現された叙述であると思われる。

但し、「竹むきが記」の「けり」がすべて伝聞の「けり」かというところではない。これはあくまでも同記の筆者が「き」と「けり」を区別していたというひとつの証明として取りあげたのである。

現在、「き」と「けり」の相違について例えば、角川「古語大辞典」では、

(第二卷 五頁／三六三—三六四頁)

へき……「けり」に比べて経験した過去の事柄を事実として回想する、という意味合いが強い。

〈けり〉…「き」+「あり」kiri+keri

「きあり」の原義から過去の事柄を現在の時点においてとらえるという意味を持つため「き」と違つて過去の事実が何らかの意味で現在に返り及んでいる場合の回想に用いる。

とあり、「名語記」の意味とは異なるものの区別をしてゐる点

に於いては現代の研究と一致していることがわかる。

以上のことから、経尊の時代以降「竹むきが記」筆者の時代に於いて「き」と「けり」とは区別があったとする考えに立つて同記を見る時、上巻と下巻の「き」と「けり」の使用傾向は偶然のことではないように思われる。

従つて上巻・前半部は「き」の使用のみで「けり」の使用がないのに対して、後半部に至つて「けり」が突然現われること、更に下巻に於いては「けり」を中心に叙していることにポイントを置き、全巻を通して叙述内容との関わりについて考察を試みようと思う。

#### 上巻・前半部・冒頭記事

元徳元年十二月廿八日、春宮御元服侍き。その夜たいりに行啓あり。安福殿を御やすみ所にせらる。めるには、上藤女房二条殿内侍まいる。萩戸にて御対面とそきこえし。御さほう御進退などことおほかる御事にて御習礼なとかねてよりいみしき御まきれにそ侍し。

(一頁)

(●△は私注につけた。以下同)

春宮の元服の儀の記事であるがその文末は「き」である。この後に続く記事も女房としての宮中奉仕の記録を中心としてど

ちらかといえば記録性の強い叙述であり、簡潔で平淡で文章に飾り気がなく淡彩である。いわば叙事的な文章である。

更に、終止形「き」を伴つて文末をなしている語十三例のうち十一例が形容詞である。

「手かくる事なかりき」(六頁)

「うつくしかりき」(六頁・三十四頁)

「おもしろかりき」(十四頁)

「をかしかりき」(二十四頁・二十九頁・三十九頁)

「いみしかりき」(二十五頁)

「ゆ、しかりき」(二十六頁)

「めにたつもなかりき」(二十八頁)

「ほいなかりき」(四十頁)

こうした感情表現を「き」によつて記した態度は、自身の感慨であることは間違いないが後述しむじみと思ひ出されるところのものではなく、「あ、あの時はおもしろかった。うれしかった。」と経験した過去の事柄を事実としてストレートに表現したものと見えよう。院政期以後、過去の助動詞「き」の衰えていく時代にあつてこれ程明確に使用しているのは注目すべきであり、又偶然ではなく意図した上でのことと思われるのである。因みに同記に先行する女房日記である「井内侍日記」や

「中務内侍日記」にはこのような「き」と「けり」を明確に使い分けた「き」の使用は見当たらない。特に中務内侍日記には終止形「き」の用例は皆無である。(最終ページの「付巻」に使用状況を記す)

次に注目されるのが、上巻・後半部に於ける突然の「けり」の使用である。ここでの記事は、西園寺公宗との恋・結婚の様子を著しい隨化表現で記しておりその筆致も王朝かな日記に近づき、先行文学に導かれた婉曲な表現・描写が多くなっている。所謂作者の自省自照の態度がみられ前半部とはまるで別人が書いたような叙情豊かな叙述である。(三十二頁—三十三頁)

おもひかけず旅ねのとこに夜をあかす事なん侍し比、きさ  
らきのはしめ、れいのやとりになちとまれるに、鳥のこゑ  
かねの音、しきりにおとろかしつ、車引出たる晩のそら  
かすみわたりて、みねのよこ雲ほのかにしらみゆく程なり。  
逢瀬によつて他所で夜を明かしたという叙述であり、明らかに公宗との関係が深まっていることを仄めかしたものであり、「おもひかけず」と殊更、私情を隨化しながらこの事を回想している時点に於いては、

吹すさむ風につけて、そこともしらぬ梅か、のほひたる  
など、いとゑんなりしも心なき身にはさしも思ひわかれさ  
りしきへ、思ひ出らる、つまにありける。

と当時は若き故に「無風流な身にはそれ程にも感じとれなかつた。」ことが「今頃になつては思い出されるきっかけであつたことよ。」と今も猶、鮮明に思い出される出来事としての叙述であることが「けり」を使用したことから伺える。更に、公宗との逢瀬の後仮寝をした朝、同僚の女房に起こされたが寝起きの顔を見られるのが恥かしかつたことを、

た、いまの心ちしていとあはれにそ思ひ出られける。

とここでも「けり」(係り結びを用いて殊更強調している。)を用いて「唯今のできことのような気がしてしんみりと思ひ出されてならなかつた。」心中を回想している。

従つて後半部の「けり」の使用は前半部と同様、叙述内容と深く結びついており、それは公宗との恋の想い出が猶「現在に迄及んでいる」ことによるものであることから上巻の前半部と後半部とでは意識の変化……「叙述の視点の違い」から生じる「き」と「けり」の使いわけと考えられるのである。

下巻は「けり」の使用が大半を示めており特に注目されるのは、先でも述べたように「けり」が自己の主観的な判断や感情を示すニュアンスを加味していることであり、そこに日記文学としての性格からくる「けり」の用法があり、それは例えば下

卷・前半部（六十頁）

八月に御かうはしめ、このまへなるまいふく門院の御かたへならせ給ふ儀なるへし。院の御かたもならせたまへれば、あるしもまいりぬ。行末もたのもしきさまなるは、心やすくよろこひおほさるゝなど、女院の御かたへもさまよくきこえさせ給よしうけたまはるそ、いとうれしう侍ける。

遺子実俊の供養姿の立派なこととその喜びを記したものであり、ひき続き実俊の中將拝賀の儀式に於いても（七十五頁―七十六頁）

ことのみまをはしめ、さほうよろつに猶すたるましきいゑの名にても、いとたのもしくおほしめさるゝさま、くるく（マ）くうけ給るもめてたくそ侍ける。

と我が子の昇進に感激した心中を叙している。「うれし」・「めでたし」という感情を示す語にさらに係り結びの用法を用いて猶一層、心中を強調している。これは先であげた上巻前半部の〈形容詞十き〉とは対照的で、過去の事柄が現在に迄及んでいる叙述として区別される。

下巻・後半部は前半部での「厳格な母としての姿」を更に強くうち出しながらも一方では亡夫菩提のために仏道修行に心を入れ、社寺参詣に励む姿が見られ特に北山奥の靈鷲寺の長老に

禪を問うくたりは自照性が強く、（七十六頁）

生あれば職あり。人かならずまぬかれさることほりめのまへなれば、さすかあく道もをそろしければ、十悪五きやくのすて給はすとときく弥陀の願力をたのみつ、悲願あやまたすは、らいかういんせうさためてうたかふへからすと、ひとへに念仏のかすをそつみける。

道心の深さを感じさせる叙述であり当時の作者の姿が如実に表われている。ひたむきに生きてきた今迄の自分自身の行動に疑問を抱く余裕ができたことが叙述より明らかである。これら他にも

- ・さらにそおとろかれける。（五十二頁）
- ・いとあさましき御ことにそ侍ける。（五十六頁）
- ・よろつをろかなる御さまにそ侍ける。（五十七頁）
- ・めつらしからんやうにおほえける。（六十六頁）
- ・すぐるなこりもしたはるゝ道にそ侍ける。（六十九頁）
- ・はなものはぬならひさへそうらめしかりける。（六十九頁）

- ・さらに又かきくれ侍ける。（七十四頁）
- ・あはれにそ思ひいてられ侍ける。（八十六頁）
- ・みすてかたきなかめの末にそ侍ける。（九十一頁）

・と、まらぬ世のならひさらにそおとろかれ侍ける。(九十三頁)

・あはれふかくそき、なされける。(九十八頁)

・いとめてたき事にそありける。(一二二頁)

・おもひあらはれつ、あはれにそ侍ける。(一二三頁)

・なをそのかみそしのはれ侍ける。(一二五頁)

・わきておもひをくられける。(一二五頁)

などのごとく感情的な語と結びついていることが注目される。

こうしてみれば、「き」と「けり」の助動詞の用例数は明らかにその執筆姿勢と相関するものであり、上巻前半部の宮中日記は客観的傾向をもつ記録的要素の強いものであり、むしろ後半部および下巻の叙述に作者の心情的な叙述態度が陰影をもつて表現されているとみるべきであろう。

従つて同記の執筆の中心(動機)は「西園寺家再興を許る厳格な『母としての姿』」の下巻部にあると考える時、あるいは下巻から書きはじめたのではないかという推測が可能になる。

よつて第二章ではこの考察をもとにして同記の成立時期について考へる。

## (二) 成立時期について

『竹むきが記』の成立時期については、和田英松氏の一括執筆説・渡辺静子氏・福田秀一氏・松本寧至氏の上巻先行説(時期と根拠はそれぞれ異なる。)が出されている。

同記が後年の回想になる日記であることから前章での過去回想の助動詞「き」と「けり」の使用傾向と叙述内容を照らし合わせた執筆態度から考えると、和田氏の指摘された

・ことに成就心院は座をさまさぬふたんのつとめ、けんてうの御願なれば、安貞二年十一月に始をかれけるより、いま

貞和五にいたるまで一時もたいてんあることなし。(八十

一頁)

・貞和五のむつきに、院新院御幸はしめ、このやまへならせたまふ。(一一六頁)

と下巻にあることから貞和五年一括執筆という説を妨げない。

(但し、上巻下巻いづれの先行かはここでは問題にしない。)つまり『竹むきが記』の最終日付けは、貞和五年(一二四九年)七月十三日(日野の塔頭に参詣)であり、その直後に於いて過去の事柄を回想した時、上巻の前半部は「経験した過去の事柄



を事実として回想する」とする「き」の使用に対して後半部と下巻は、「過去の事柄を現在の時点においてとらえるという意味を持つため「き」と違って過去の事実が何らかの意味で現在に迄及んでいる場合の回想に用いる。」とする「けり」を用いたとして貞和五年と観ることは可能ではある。しかし渡辺氏の指摘される様に、上下巻通算二十数年間の事柄を一時期に一気に書きあげたとするには少々年月が長すぎる感があり貞和五年一括執筆とするには猶問題がある様に思われる。そこで上巻先行説が考えられる訳であるがこの上巻先行説とする具体的な時期の推測として福田氏はその上限を公宗の誅（建武二年・上巻末尾の記事から満二年の後）後、下限を下巻冒頭の記事が建武四年十二月であることからそれ以前として建武三・四年頃であろうとされている。

また松本氏も福田氏と同様、公宗の死後より更に後のこととされているが、福田氏とはその理由が異っており、「上巻が光厳天皇の御元服・後醍醐天皇の禁里脱出などから始まっていることから、足利高氏が後醍醐天皇に叛き光厳・豊仁親王を奉じて入京・豊仁（光明）踐祚、次いで室町幕府が開かれ後醍醐天皇は吉野へ行幸といった政変が相次いで一応は北朝の治世となるといったところが上巻はじめの状況を想起させるに充分であ

るから作者もそのようなことを考えながら執筆した。」と推測されて、建武三年の中頃から四年十二月迄の一年半くらいの範圍とされている。両氏の御論は根拠は異なるが共に上巻先行である。以上が同記の成立時期について現在迄に出されている主な説であるが、私は下巻先行を想定するのであり従来の説とは異なる。従ってその根拠を順を追って述べることにする。

まずは上巻の執筆時期を決める手懸りが上巻の元弘三年五月の「伊吹の事件」の記事にある。（四十六頁―四十七頁）

近江国伊吹とかやにて、五宮といふ人、御所くゝと、めてまつらせ給よしきこえしかは、いみしともさらにはんかたなし。かゝる程に、伊吹に御からひつともわたさるとて、これより御使をそへらるへきよし、当時の將軍よりあり侍けるになかれ矢とかやにあたりて、みちにとまれるよしきかせ給て、わざとたつね給。御返事にそへてきこえ侍。かくてたにすてぬならひの身のうさは

思ひしよりもあられけるかな

これは六波羅が赤松則村・足利高氏らの軍の焼き打ちに会つて、主上（光厳院）以下東国へ落ちて行き、作者の父資名や兄氏光も帝に随ったが、氏光は流れ矢にあたって傷つき資名は出

家する。(これについては『太平記』巻九へ主上皇為五宮被囚給事付資名卿出家事)に詳しく記されている。)作者はこの時、里(日野家)にいたが、危害の及ぶ恐れがあるため、安居院の知人をたよって隠れていたが、西園寺邸より使いがあり、北山第に迎えられており公宗も作者と別れを惜んで帝に随って東国へ下ったが途中から(玉井幸助氏の推測によると、後事処理のため)京都へ引き返していた。一方、主上の一行は伊吹で五宮(五辻宮)に道を阻まれて神器を奪われて囚われの身となって京都に戻ってくるがその時作者ははじめて、父・兄の家を聞いて驚き遁世の心をも抱くが、持明院殿の尊貴の方々になだめられてやがていくらか落ち着く。といった場面である。この事件に関する参考資料として『園太暦』と『皇年代略記』より抜粋して記しておく。

自三月十二日主上・上皇遷御六波羅、五月七日御没落事、又観応三年不及沙汰、天下大略無主時分也。

〔園太暦〕巻五文和四年四月十一日  
一六頁—一七頁

六月五日丁卯還幸二條富小路殿復皇位……賢所豫御座禁中、去五月八日頭中将源忠顯舍伯州詔命奉迎之案申禁中。七日夕三主御没落之時、為女官沙汰奉入楯大納言公宗卿北山第。自彼第奉

入禁中也。

〔皇年代略記〕・『群書類從』第三輯・帝王部・卷第三十二(さて同記中の「当時の將軍」とは誰を指しているかであるが元弘三年五月七日という日付けから時の鎌倉將軍の守邦親王と考えられ渡辺氏注5もそのように考えておられるが、玉井幸助氏注6は足利高氏を指摘されておられる。この場合「当時の」が問題になる訳で「当時の」は二通りの解釈が可能であり「その時の」とする場合は渡辺氏のいわれる様に守邦親王であり、「ただ今の・現在の」とする場合この日記の執筆時の將軍となる訳である。玉井氏は特に高氏とする根拠を述べておられないが、このころ京都とその周辺では京都奪取の殊勲者である足利高氏が京都の支配をかためつつあった。既に鎌倉幕府に反旗を翻した時から主として西国方面の守護や有力な地頭に討幕への参加を呼びかけて六波羅軍を撃破するといち早く六波羅に陣を構えたという高氏の行動をみても京都北山第にいる公宗に命令を下した可能性が高いといえる。又、西園寺家は代々関東申次であり特に足利高氏と親しかったことから(下巻に関係記事あり。)敢えて当時は敵方である高氏の指示に応じたことも考えられるため鎌倉將軍、守邦親王ではなく足利高氏とする可能性は高いと思われる。更に「当時の將軍」を足利高氏と観る根拠に「梅

「松論」に於ける高氏の呼称がある。

元弘三年三月十二日、「將軍旗卷の事」の記事に、

元弘三年三月十二日、二手にて鳥羽・竹田より洛中に資入處に六波羅の勢馳向て合戦をいたし追返す。依て京都より早馬、關東馳下間、當將軍尊氏重て耐手として御上洛あり。御入洛は同四月下旬なり。元弘元年にも笠置の城退治の一方の大將として御突向ありしなり。今度は當將軍、淨妙寺殿御逝去一兩日の中なり。(新撰日本古典文庫・五六頁)

と元弘三年に於ける高氏は「當將軍尊氏」「當將軍」という呼称で記されている。これは先の高氏の行動と合わせ考えると「竹むきが記」に於ける「當時の將軍」は足利高氏を指していると思われる。足利高氏は建武二年(一三三五年)八月に征東將軍になり暦応元年(一三三八年)に征夷大將軍になっている。「梅松論」の執筆時期は貞和五年もしくはその数年後と考えられているが、この時期に於いての征夷大將軍は間違いなく足利高氏である。「梅松論」にいう「當將軍」とは征夷大將軍を意味しており従つて「竹むきが記」の「當時の」も「ただ今、現在の」として足利高氏とみて「梅松論」と同様に高氏が征夷大將軍になった暦応元年八月以降の執筆として上巻の成立時期の

上限と考えるのである。

次に、下巻の成立乃至全体の完成についてだが、先でも述べたように和田氏の説である記事最終年の貞和五年とすることに多少の疑念がある。

その一つとして下巻の時日の記し方にある。下巻の書き出しに注目すると、

ことしこの君まな事あり。(五十頁)(建武四年の記事)  
實俊のふかそぎの儀の記事

ことしはふかそぎあるへきを、永福門院にきこゆへうなどおもふ程に、としのうちに御らんすへきよし侍れば、わさともさるへきにて、十二月廿八日に北山におはします二の殿くしきこえ給。(五十三頁)(暦応元年の記事)

北山第一の御幸始めの記事

ことし御かうはしめ、この山へならせ給。(六十四頁)(暦応五年の記事)  
實俊の中將拝賀の記事

今年ハさいにそおはすへき。(七十六頁)(康永元年の記事)  
といったように「ことし(今年)」という時日の記し方は上巻には例がなく、上巻冒頭の元徳元年十二月廿八日、春宮御元服待きの叙述とは明らかに相違がある。これは先の助動詞

「き」と「けり」の使い分けと相俟って興味深い。

本来、「今年」というのは「その人が現在身をおいている年」である。しかし同記の「今年」はそうした意味での使用でないことが「今年」と記された周辺の記事によってわかる。所謂日並の記ではなく回想の記なのであり、従ってこの「今年」というのは歴史的今年である。過去の事柄を現在の形で執筆しているのである。同じく過去を回想するにあたって上巻では事件のあった時日で記し、「き」でしめくり現在とは完全に遮断した態度が窺えるのに対して、この下巻の特徴は示唆的であり、ここに下巻の先行の推測をするのである。更に、同記の執筆動機・中心視点を、「母としての姿」である下巻部であると考えた場合、この部分を書きとめようと思つて筆を執つたことにより感情が前面的に出でしまい、文体にも如実に表われて如何にも日並の記を思わせるような切実なものとなつたといえるのではなからうか。因みに「今年」を用いた記事はすべて実俊のことについてである。そうすると、上巻前半部の宮中の記事は過去の出来事としてとらえているために現在の（執筆時）の感情は介入する隙間はなく客観的に記したことが叙述に表われたとみて、この部分が執筆の動機となつたとはいへないといのである。正確さという点に於いてはどの部分よりも確實な

のは恐らく宮中で奉仕をする若い女房としての名替を事細かに記録したものが手元にあり、それを本に記していったからであらう。記録が残つておればどれ丈年月が経つて記したとしても正確なものになるのは当然であり、又そこには自己の主観的な判断や感情の介入は皆無である。更に上巻・後半部も叙述に変化が見られるもの下巻を中心を置いた場合、意識はやはり前半部と同様「き」である。（この上巻・後半部の叙述態度は後述べるのでここでは省く。）

こうして下巻先行と考えるのであるが、下巻を通して同時期に執筆したかというとはなく二段階の書き継ぎを想定する。その根拠は、「今年」という叙述にまさに呼応したかのよう

うに  
いま貞和五にいたるまで一時もたいてんあることなし。

（八十一頁）

とある点にある。此迄の叙述内容は、実俊を中心に家門再興を許る「母としての姿」を記した部分であり、それらの事柄を事細かく述べて、ある程度メドがついて安堵したのであらう。「いま貞和五にいたるまで……」と記した後の叙述内容は、仏道に志ざす作者像が頭繁に表われてくるのである。又「いま貞和五」と記した直後の康永二年（一三四三年）、一年間分の記事

が全くないことも加えて、ここで一旦筆が置かれたと考えられるのではなからうか。

しからばその後の執筆がいつ頃なのか、下巻末尾の時日に注目すると、

貞和五のむつきに、院新院御幸はしめ、このやまへならせ  
たまふ。(一一六頁)

とあって前の「いま貞和五……」と同じく貞和五年の執筆を思わせるような書き方であるが「貞和五のむつきに……」といった直後に於いて

そのとしの春のちもくに、三位中將中納言になさる。(一

一七頁)

同春のころ宮にて、れうちめかしきこと侍に、たかつかさおい人かたりて、めつらしうのとかなるに、かへるなこりをいかにとしたひの給へる。(一一八頁)

とあってこれらは先の

いま貞和五にいたるまで……

とは矛盾する。「貞和五のむつきに……」と「いま貞和五にいたるまで……」とが同じ貞和五年の執筆とするならば、「そのとしの春」というような曖昧ない方はせず前と同じように「ことしの春」とするべきであらうし、「同春の

ころ」は「ことしの春のころ」とするはずである。更に叙述内容も「いま貞和五にいたるまで……」を境として康永三年以降は自ら仏道修行に専念する姿が中心に描かれており、執筆の視点に変化がみられることから、「いま貞和五にいたるまで……」迄が貞和五年の執筆で、一旦ここで筆を置き、その後末尾迄を数年後に書き継いだとする可能性は十分に考えられる。こうして下巻の二段階書き継ぎを考えるのだが、福田氏は「貞和五のむつきに……」といった直後の「その年の春」・「同春のころ」といういい方が先の「いま貞和五にいたるまで……」とそぐわないと指摘され氏も二段階の書き継ぎを考えておられるが、これは執筆の視点の相違によるものであり(下巻・前半部の)執筆のテーマが「母としての姿」という点で一貫していることから下巻の成立時期は「いま貞和五にいたるまで……」と記した処迄を貞和五年に執筆し、その後は貞和五年以降、数年後の執筆と考えるのである。具体的な年は今のところ決め手となる事実はないが、叙述内容や文体に著しい変化のないこと、又いくつかの日付の曖昧な箇所があることを考え合わせて恐らく貞和五年以降、比較的晩年に執筆し脱稿したと思われる。跋文ともいふべき最後の歌二首

もしほ草かきであつむるいたつらに

うき世をわたるあまのすさみに

なき跡にうき名やとめんかきすつる

うらのもくつのちりのこりなは(一一九頁)

藻垣草をかき寄せて集めるように拙い歌草を書き留める、無意味につらいこの世を生きるあまのなぐさみに。

と同記を書き集める意を含め、又

死んでしまった後にうき名を残すことになるだろうか、

うらの藻屑が散るように書き集めたものが残ったならば、と恐れを抱きながらも書かずにはいられたなかったことの告白ともいえる。二首の歌は跋文にふさわしく今迄には見られない老境が一段と感じられるのである。「もしほ草……」の歌の「あまのすさみに」は海人と尼とが掛けてあると推測した場合、作者が出家した年が決め手となるのだが不明であつて決め手とはならないのは残念である。

以上の如く、従来の説を検討しつつ成立時期を考察したが最後にまとめて結論を記しておく。

まず第一に、上巻執筆時期は足利高氏が征夷大將軍になつた暦応元年以降である。

第二に、過去回想助動詞「き」と「けり」の明確な使い分け

と執筆の中心テーマ、更に時日の記し方の相違、特に下巻・前半部の時日の記し方の特徴から、下巻から書き始めたと考え、ただし下巻は二段階の書き継ぎであり、貞和五年とその数年後とする。

第三に、暦応元年以降の執筆とする上巻は下巻執筆終了後か、その途中であるか。これは先の二首の跋文である歌は全体の跋文としてもふさわしく思われるため、途中での執筆と考える。「いま、貞和五にいたるまで……」という貞和五年の記事の後が一年間空白であることよりここで書かれた可能性を考えてみるのだがこれは推測にとどめておく。

先で簡単に触れた上巻後半部の執筆態度については次のように考える。「母としての姿」を中心に同記の執筆の目的を果たした安堵感により、そこに至る迄のプロセスも記しておこうという気持ちになり女房時代を振り返り記録していたものを手懸りとして記したが、公宗との恋愛、結婚の叙述になつてからは自己の主観的な判断や感情が押えきれず殊更はかしたような書き方になつた。しかしこの著しい體化表現も実は下巻が既に書かれていたことを意識してのことと考えると上巻の跋文的言葉である、

いといみしうき、ところなき、いたつらのとはすかたりは、

なをのこり侍へきにやとそ。

は書くべくして書き得なかつた夫公宗、刺殺の痛ましい事件を省略したことへの、そして既に書かれていた下巻へのつながりを考慮した上でのことわりの意味をもつものであったとみるこ  
とができるであろう。こうして成立に関わる中巻の存在は「はじめからなかった」と考えるのである。

注1 「竹むぎの日記について」(史学雑誌・明治四十四・六)

注2 「竹むぎが記」考・(清和女子短期大学紀要創刊号・昭和四十四・八)

注3 竹むぎが記試論——特にその成立と史的意義について——

(武蔵大学・人文学会雑誌第四卷一号・昭四十七・七)

注4 「中世女流日記文学の研究」(明治書院刊・昭和五八・二)

注5 「うた、ね・竹むぎが記」(笠間書院刊・昭和五十・六)

注6 「日記文学の研究」(塙書房刊・昭和四十・十)

注7 「梅松論」の成立は、貞和五年とする菅政友氏の説が有力であったが一方、正平七年以降の成立と考える五十嵐梅三郎氏の説、又小川侶氏の正平七年以降説があり現在これらが通説と考えられている。(新撰日本古典文庫・『梅松論・源成集』の解説による。)

時代	作品	数	き	けり	計	調査、利用図書	
平安時代	10世紀	土佐日記	2	35	37	『土佐日記本文及び語彙索引』笠間書院 小久保崇明・山田發微樹	
		%	5.4	94.6	100.0		
	紀	蜻蛉日記	11	143	154	岩波日本古典文学大系	
		%	7.1	92.9	100.0		
	11世紀	和泉式部日記	数	0	6	6	岩波日本古典文学大系
			%	0	100.0	100.0	
		紫式部日記	数	33	38	71	岩波日本古典文学大系
			%	46.5	53.5	100.0	
		更級日記	数	1	18	19	『更級日記総索引』武蔵野書院 東 節夫 他編
			%	5.3	94.7	100.0	
成尋阿闍梨母日記	数	11	4	15	『王朝三日記新釈・成尋母日記』 宮田和一郎校註・健文社		
	%	73.3	26.7	100.0			
12世紀	讃岐典侍日記	数	6	6	12	『讃岐典侍日記全注解』 玉井幸助著・有精堂	
%	50.0	50.0	100.0				
鎌倉時代	13世紀	たまきはる	数	152	21	173	『たまきはるの総索引』明治書院 鈴木一彦・雑子共編
		%	87.9	12.1	100.0		
	建礼門院右京大夫集	数	27	4	31	新潮・日本古典集成	
		%	87.0	13.0	100.0		
	うたたね	数	0	21	21	『うた、ね本文及び索引』笠間書院 次田香澄・酒井憲二編	
		%	0	100.0	100.0		
	弁内侍日記	数	60	4	64	『弁内侍日記新注』大修館 玉井幸助著	
		%	93.8	6.2	100.0		
十六夜日記	数	3	17	20	『十六夜日記校本及び総索引』 江口正弘編・笠間書院		
	%	15.0	85.0	100.0			
中務内侍日記	数	4	4	8	『中務内侍日記新注』増訂版 玉井幸助著・大修館		
	%	50.0	50.0	100.0			
14世紀	とはすがたり	数	123	37	160	新潮日本古典集成	
	%	76.9	23.1	100.0			
南北朝	竹むきが記	数	73	56	129	古典文庫	
%	56.6	43.4	100.0				

※. %は二動詞相互の比率である。

(考)鎌倉中期の「うたたね」には「き」の使用が無い。

院政期以後、過去の助動詞「き」の用法が衰退する傾向を物語っていると考えると、『十六夜日記』や『中務内侍日記』の使用状況にもそれが窺えるのではなからうか。

ところが「うたたね」より百年も後の『竹むきが記』に於いては『紫式部日記』等と同じような形で残しているのが注目される。